

2. 宗像市の昆虫の概要

(1) 宗像市の昆虫類相の特徴

本市の過去のコウチュウ類に関する調査記録は、他市町に比べて、比較的よくなされている方である。これらの分析、また、今回の調査で出現した69科614種のコウチュウ類、9科41種のチョウ類等から、本市の昆虫類相の特徴を述べる。

① 山地性の昆虫が見られる

本市は全体として、丘陵性の低山が多く、最高峰でも孔大寺山の標高499mである。また、それらの大部分はスギやヒノキの人工林であり、そこでは昆虫はほとんど見られない。

しかし、市内の城山の大部分は、非常に良好な自然林に覆われており、深い森林で見られる種やブナ帯で見られる種が多数発見されている。今回の調査でも発見されたフクチコブヤハズカミキリや記録があるヒゲナガゴマフカミキリ等は、県内では普通、ブナ帯などに見られる種である。このほか、オオキノコムシ科やナガクチキムシ科の多くにそのような種が見られる。

沖ノ島は暖地性のコウチュウと共に、内陸性のフタオビミドリトラカミキリが多産し、フクチコブヤハズカミキリの記録もある。

② 暖地性の昆虫が見られる

本市北部は玄界灘になっており、対馬暖流の影響は大きいものと思われる。島嶼部に限らず、全域に暖地性の種がよく見られる。特に、沖ノ島においてはその傾向が強い。琉球列島や伊豆諸島あたりの種が対馬暖流に沿って分布が北に延びているものもあり、そのような種も多い。オキナワコアオハナムグリ、アヤムネスジタマムシ（1968年、城山産）、ムナキヒメジョウカイモドキ、フタイロカミキリモドキ、リュウキュウヒメカミキリを始めとするヒメカミキリ類、ムモンチャイロホソバネカミキリ（記録）、アトモンチビカミキリ、タケトゲハムシ、ヨツボシハナコブヒメゾウムシ、ワタナベヒサゴクチカクシゾウムシ（記録）等、あげるときりがない。ただ、暖流だけの影響とは考えられないほど増加している種もあり、これについては後述する。

③ 海岸砂丘特有の昆虫が見られる

さつき松原には海岸砂丘が続き、海浜植物も見られる。ここには、独特のコウチュウ類が多く見られる。セマルケシマグソコガネ、ニセマグソコガネ（いずれも県絶滅危惧Ⅱ類）、アカオオハナコメツキ、ルリキオビジョウカイモドキ（記録）、数種のゴミムシダマシ類やエンマムシ類、ゾウムシ類等は海岸砂丘でなければ見られない貴重な種である。

④ 福岡県RDBに選定された種、基準標本となった種が多い

本市で記録されたコウチュウの中には、福岡県RDBに選定された種が多数ある。このことは、それだけ自然環境が複雑で、かつ、良好な状態で保全されてきたことになる。今回の調査でも、そのいくつかは再発見することができた。

本市を基準産地として発見されたコウチュウ類が多数ある。その主なものは城山であるが、大島や沖ノ島を基準産地とするものもある。学術的には、基準産地の種は、その種の基準となるものであり、同種と同定された他の産地のものより貴重なものである。

(2) 宗像市を代表する自然環境と昆虫相

本市の昆虫相を代表する自然環境は、出現する種によっていくつかあげられる。そこで、今回、調査対象とした13の地域について地点別に概要と評価を行った。評価は、最も価値の高い地域をランクA、続いてランクB、ランクCとした。これらの地域は【地図8-3】のとおりである。

① 城山

今回の調査期間中、当地では245種のコウチュウ類を発見した。これは、他の調査地域を遙かに超える種数であるが、当地から過去に1,000種以上のコウチュウ類の記録があることから、4分の1程度が見出されたに過ぎない。

今回の調査で発見されたものの内、キムネツツカッコウムシ、ツキワマルケシキスイ、オオキノコムシ科とナガクチキムシ科の大部分、セダカコブヤハズカミキリ、ヒメマルミツギリゾウムシ等は、普通、高地のブナ帯などに見られる種で

あり、同様に記録のある種ではアカアシクワガタ、ダイセンビロウドコガネ、ミヤケチャイロコガネ、ムラサキツヤハナムグリ、カメノコテントウ、ヨツコブゴミムシダマシ、ヒゲナガゴマフカミキリ等も高地で見られる種である。一方でマメクワガタ、シロスジコガネ、ハネナシセスジキマワリ、ヨツスジトラカミキリ等の暖地性、沿岸性の種も多数記録されており、当地の特異性がうかがえる。

また、今回の調査でも分かるが、ケシキスイ科、オオキノコムシ科、コキノコムシ科、ホソカタムシ科、ゴミムシダマシ科、ナガクチキムシ科、クチキムシ科、カミキリムシ科、ヒゲナガゾウムシ科等、森林中に見られるグループや食菌性のコウチュウ類が他のどこよりも圧倒的に多く、その豊かな自然環境がうかがえる。

当地を基準産地とする新種や福岡県または九州で唯一の産地となっている種、福岡県RDB掲載種も多数あり、学術的にも大変貴重な地域である。

従って当地は宗像市を代表する昆虫相を有する地域と言え、さらにいえば、全国の昆虫研究者が注目している場所とも考えられる。 【ランクA】

② 武丸周辺台地

今回の調査期間中、当地では135種のコウチュウ類を発見した。水田や畑地ばかりで、周辺の森林も人工林であり、コウチュウ相は極めて貧弱である。植栽されたクリの花には多数のコウチュウ類が集まっていたが、普通種ばかりだった。全体に草につく種や明るい場所にいるコウチュウ類が多く、希少種や学術的に貴重な種はほとんど見あたらなかった。ゲンジボタルは多産しており、ホタルの産地としては重要。 【ランクB】

③ 名残の谷地田

今回の調査期間中、当地では92種のコウチュウ類を発見した。水田や畑地ばかりで、雑木も少なく、ほとんど昆虫は見られないだろうと思っていたが、むしろこの種数でもよく見られた方だと思う。武丸周辺台地と同様、草につく種や明るい場所にいるコウチュウが多く、普通種ばかりであった。コガネムシは、最近随分少なくなった里山のコウチュウであり、ハッカハムシも最近急激に少なくなった種である。いずれも当地には多産する。モモチョッキリによるビワへの加害は大きく、ほとんど結実していない状況だった。

クロセセリは、局地的で、あまり多くない種で、今回調査で唯一この地から発見された。

これ以上の周辺の開発がなければ現在の里山の昆虫も生息を続けていくことができると思う。 【ランクB】

④ 許斐山

今回の調査期間中、当地では159種のコウチュウ類を発見した。城山に次ぐ種数である。特に、山頂一体は広く自然林に覆われ、ほとんどのコウチュウはここで見られた。全体としては城山同様、森林性や食菌性のコウチュウが数多く見られる。カキノフタトゲナガシンクイ、ガロアヒメナガシンクイ、クロヒメナガシンクイは、いずれも珍しい種である。カッコウムシ科のコウチュウも多く、キム

ネツツカッコウムシは山地性の種である。同様にゴミムシダマシ科の種も多く見出され、いずれも森林性のものである。ベーツヤサカミキリはカミキリムシ科の珍種で、5月の短い期間に発生する。宗像市唯一の産地である。ゴマフカミキリは、普通種といわれる割に希な種であるが、山頂一帯に見られる。

山頂では、チョウ類も多く見られ福岡県RDBで準絶滅危惧に指定されているヒオドシチョウが発見された。最近では希な種で、食草となるエノキは多い。

登山道がよく整備され、登山者も多いが、山麓部を除く全体の自然環境は良く保たれている。調査を続ければさらに多くの昆虫が発見されると考えられる。

【ランクA】

⑤ 多礼貯水池周辺

今回の調査期間中、当地では152種のコウチュウ類を発見した。水田や畑地が多いが、放棄された場所も見られた。道路脇の雑木を調べたが、森は浅く、荒れていた。調査期間中に見出された種には、放棄田の雑草や植栽されたクリの花、伐採された雑木等から採集したものも多い。クロヒメナガシクイ、ツヤケシヒメホソカタムシ等は珍しい種である。

全体として貧弱なコウチュウ相で、普通種ばかりで特に重要な種も見られなかった。

【ランクB】

⑥ 孔大寺山山麓

今回の調査期間中、当地では68種のコウチュウ類を発見した。調査期間中、一度だけ山頂近くまで登って見たが、途中はスギばかりで、昆虫の姿はほとんどなかった。見出した種のほとんどは、山麓のマテバシイの花や植栽されたクリの花からである。クリの花から得られたホソコハナムグリ、ジュウシチホシハナムグリ、トゲアシヒメゾウムシ等は珍しい種である。

全体として貧弱なコウチュウ相で、普通種ばかりで特に重要な種も見られなかった。

【ランクC】

⑦ 樽見川上流

今回の調査期間中、当地では85種のコウチュウ類を発見した。主に孔大寺山へ向かう小道周辺を調査した。放棄された畑地やみかん園等が続き、昆虫は非常に少なかった。その上、汚物などが廃棄され異臭が漂うなど、環境としても最悪の調査地域であった。注目すべきは、山地性のヒメキンイロジョウカイとカメノコテントウが発見された。いずれも、このような低山地ではまず見られない種である。

全体として極めて貧弱なコウチュウ相で、上記の種を除き普通種ばかりで特に重要な種も見られなかった。

【ランクC】

⑧ さつき松原

今回の調査期間中、当地では95種のコウチュウ類を発見した。この地は、江口海岸に沿った砂丘植物のある地域とクロマツ林地域に分けて考察したい。

砂丘部では、砂丘独特のコウチュウ類が多く見られ、今回の調査でも福岡県RDBで絶滅危惧Ⅱ類に指定されているセマルケシマグソコガネ、ニセマグソコガネの2種が再発見された。このほか、ハマベエンマムシ、アカアシコハナコメツキ、ハマヒョウタンゴミムシダマシ、オオマルスナゴミムシダマシ、トビイロヒョウタンゾウムシ等の海岸砂丘独特のコウチュウ類も多数見られた。また、下が砂地の場所に生えるヨモギ類からはアカオオハナコメツキが多数発見された。本種は原記載以降100年以上再発見されなかった種で、数年前、福岡県津屋崎町と遠賀町でわずかな個体が発見された珍しい種である。本種が多産するのはこの地だけである。このほか、当地からは、これら以外にも砂丘独特のコウチュウ類の記録が多数ある。

釣川河口近くや県立少年自然の家付近の明るい場所には本来佐多岬以南に生息するオキナワコアオハナムグリが見られる。9月にはヌルデの花に在来種であるコアオハナムグリと共に極めて多くの個体が見られ、両種の雑交個体と思われる個体も採集している。

クロマツ林地域は森林の深さの割に昆虫が少なく、薬剤散布による害虫駆除の影響もあると考えられる。クロホシシギゾウムシはナワシログミから発見されたが、極めて希な種で、県下から四王寺山の記録があるだけである。

このように、特に砂丘部については、植生を含めた全体の保全を考えていく必要がある。 【ランクA】

⑨ 地島遠見山と海岸地域

今回の調査期間中、当地では149種のコウチュウ類を発見した。島の南部の海岸沿いのトベラにはシロスジドウボソカミキリが多産する。本種は、カミキリムシ科の珍種で、琉球地域に多くの種を産する。また、トベラの花にはオキナワコアオハナムグリが少なからず見られた。本種は最近になって北九州でも発見された種で、本来の分布は琉球地域である。伊豆諸島原産のヨツボシハナコブヒメゾウムシも多産し、暖流に沿った地域に見られることから、対馬暖流が大きく関係しているものと思われる。オキナワコアオハナムグリは1997年前後に本島のコウチュウ類をかなり調査したが、その際は全く見られなかった種で、その後に定着した可能性が強く、地球温暖化との関連が懸念される。

また、植栽されたビワの大部分はモモチョッキリに食害されていた。遠見山一帯に見られるヨコヤマヒメカミキリやリュウキュウヒメカミキリは暖地のカミキリで、全体に暖流の影響が強い。記録として南西日本に局地的に分布するヤノトラカミキリも多産していた。サメハダヒメゾウムシは、マユミに見られる大型のヒメゾウムシで、希な種である。

全体として本土にごく近い島でありながら暖地性のコウチュウがよく見られ、

特に、遠見山一帯は現在の自然環境が保たれる限り、昆虫にとっても良いすみかとなろう。沿岸部においては小規模な畑地があるが、不法投棄されたゴミなども少なくない。 【ランクA】

⑩ 大島御嶽周辺

今回の調査期間中、当地では137種のコウチュウ類を発見した。山頂より南側にはよい自然林があり、灯火採集では珍種のキイロミヤマカミキリが飛来したし、記録ではヒメボタルが多産する。ヒメボタルは自然林の中に発生し、当市では、城山と沖ノ島の記録がある。また、牧草地には記録としてゴホンダイコクコガネ等の糞虫も発見されている。キドノミナガクチキムシは御嶽の自然林内の落ち葉の中から得られた新種で現在のところ、本島以外では発見されていない。一方で佐多岬以南から知られていたムナキヒメジョウカイモドキやタカオマルクチカクシゾウムシの近似未記載種、暖地に多いフタイロカミキリモドキ、伊豆諸島から知られていたワタナベヒサゴクチカクシゾウムシの記録もあり、暖地のコウチュウも少なくない。

この周辺には、旧村営の牧草地が多く広がり、記録としてゴホンダイコクコガネ、カドマルエンマコガネ、オオマグソコガネ、オオフタホシマグソコガネ等の牛糞に見られるコウチュウがある。いずれも、県内ではほとんど見なくなったコウチュウである。

全体に乾燥が強く、本土よりは昆虫の種数や数は少ないようだが豊かな自然林があるこの地では、他の福岡県北部の島に比べ、豊富なコウチュウ相を呈している。御嶽も南東部は広い面積のよい自然林が残っているが、北西部は牧草地となっている。 【ランクA】

⑪ 大島東部

今回の調査期間中、当地では123種のコウチュウ類を発見した。調査域は、島の東部の平地や海岸付近である。暖地のコウチュウが多く見られ、オオカンショコガネ、フタイロカミキリモドキ、ニセコガタマツシバンムシ、ハネナシセスジキマワリ、テツイロヒメカミキリ、ヨコヤマヒメカミキリ、リュウキュウヒメカミキリ、アヤモンチビカミキリ等が見られた。ツマフタホシテントウ、ナガカツオゾウムシ、カギアシゾウムシ、ワタナベヒサゴクチカクシゾウムシ等の希な種の記録もある。最後の種は、伊豆諸島から発見されていた種である。この地域は、水田や畑地になっている場所もあるが、全体として沿岸性の強い植生である。

【ランクA】

⑫ 沖ノ島

今回の調査期間中、当地では101種のコウチュウ類を発見した。本市において、特異な昆虫が数多く発見されている地域の一つである。本島のコウチュウ類の特異性は大きく二つあり、一つは強い暖流の影響で琉球地域のコウチュウ類が見られること、一つは内陸性のコウチュウ類が見られることである。前者として、セスジナガキマワリがある。本種は、その主な分布域が屋久島以南であり、九州周

辺では対馬から知られている。本島では極めて普通に分布している。市内では、近似の同属種、ハネナシセスジキマワリが大島・地島・城山に分布するが、本島には分布しない。記録種としてのムモンチャイロホソバネカミキリは、琉球地域から暖流に沿って分布しており、本島はその北限である。同じくヒメミツギリゾウムシは屋久島以南オーストラリアまで分布する種で、その特異な分布状況が分かる。暖地の種としては、マメクワガタやリュウキュウヒメカミキリが多く見られるが、本種も暖流に沿って分布している。一方で、コマルキマワリ、ホソクビキマワリやフタオビミドリカミキリ、記録種としてのフクチコブヤハズカミキリ等、内陸の山地で見られる種もある。今回の調査で始めて発見されたオビキノコヒゲナガゾウムシは京都若狭湾冠島から発見された種で、その後、すぐ北の福井県三国町雄島からだけ発見されている珍しい種である。また、チャイロチビゲンゴロウは1930年代に本島から記録されたが、今回の調査でおよそ70年ぶりに再び多数発見された。福岡県唯一の産地である。記録としてクロツバメシジミがあり、福岡県RDBで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。このように、本島は大島や地島といった陸地に近い島とは、その様相が随分異なっており、学術的価値はさらに大きいと言える。自然状態は全島が国指定天然記念物に指定されていることと、何より宗像神社の神域になっていて一般人の立ち入りを禁じているため、良好な状態で保全されている。現在の状態が続く限り、本島の昆虫も保全されよう。

【ランクA】

⑬ 草崎半島

今回の調査期間中、当地では136種のコウチュウ類を発見した。調査域は、半島周辺の平地や海岸に沿った道路沿いである。この地域に特徴的なことは、なんと言っても暖地のコウチュウ類が数多く見られることである。例えば、6月にはヒメジョオンやアカメガシワの花に非常に多くのオキナワコアオハナムグリやリュウキュウヒメカミキリ、テツイロヒメカミキリが、トベラの花にはモモフトカミキリモドキ、枯れ木にはアトモンチビカミキリが多産し、まるで鹿児島県佐多岬でも歩いているような様相である。オキナワコアオハナムグリは九州北部では最も多産する地域である。本種が福岡県から初めて採集されたのは1999年北九州市藍島である。リュウキュウヒメカミキリが本土側に多産する地域も北部九州では極めて希である。アトモンチビカミキリは、亜熱帯地域に生息するカミキリムシで、佐多岬以南に多産する。福岡県からは姫島から数例が知られるだけである。また、チビヒョウタンヒゲナガゾウムシも、熊本県天草や福岡県相ノ島などから知られる暖地のコウチュウである。海岸部は津屋崎町に属すが、それに沿った道路沿いでは魚の死体などにヒメヒラタシデムシ、ルリエンマムシ、ドウガネエンマムシ等の特有の種も見られる。また、ヒメハンミョウ、エリザハンミョウ等の沿海性のハンミョウ類も見られる。

半島部の中心部は良好な自然環境が保たれている。しかし、今回多くの貴重な

種が見出された南西部沿岸地域は極めて自然状態が悪い。土地開発も行われており、大きな樹木もほとんど伐採されていて、荒地となっている場所も多い。今後も温暖な地域に生息するコウチュウ類が最も発見される可能性の大きい地域である。

【ランク B】